

第3回中部圏広域地方計画有識者会議（概要）

日時：平成27年8月17日（月）10:00～12:00

場所：ホテルメルパルク 名古屋2F 「平安」

1. 開会

（中部地方整備局：茅野局長）

- ・国土形成計画の全国計画については、4/30に奥野座長が会長を務めておられる国土審議会でご審議いただき、8/14に閣議決定された。
- ・本日の会議では、計画の骨子を文章化した中間案を提示させていただく。これまでの有識者会議でいただいたご意見を念頭に、中部の誇るものづくり、歴史、文化、ゆとりある生活環境などの地域資源を生かし、2050年という長期の展望をしつつ、2027年のリニアの東京-名古屋間の開業を見据え、今後10年間の指針を示した地域戦略となるよう、中間案についてご意見をいただきたいと考えている。
- ・本日は、今後策定を見据えている「中部ブロックにおける社会資本整備重点計画」についても、ご説明させていただく予定としている。この計画は、中部圏広域地方計画との調和を図り、中期的な社会資本整備の具体的な指針となるものであり、この計画についても、ご意見を賜りたい。
- ・中部圏広域地方計画については、本日の会議でのご意見を踏まえ、9/10の議会に諮ってまいりたい。

（事務局：松岡中部圏広域地方計画推進室副室長）

- ・大西委員、佐々木委員、染谷委員は欠席
- ・資料1説明

2. 議事

1) 新たな中部圏広域地方計画策定について

（事務局：大野中部圏広域地方計画推進室長）資料2～資料4、参考資料1説明

2) 「中部ブロックにおける社会資本整備重点計画」（基本的考え方）について

（事務局：森山企画部長）資料5、参考資料2説明

3) 意見交換

（奥野座長）

- ・全国計画の基本理念は対流である。対流が新しい価値を生み出すというのは全総時代から一貫しているが、それが現在の対流につながっている。
- ・子どもが生まれる社会や国土の多様性の確保を考えると、東京一極集中の是正は重要である。日本の多様性のある文化は、参勤交代の山筋谷筋の文化で培われた。
- ・対流を生み出す熱源は、スーパー・メガリージョン、東京オリンピック・パラリンピック、コンパクト+ネットワーク、大学である。特に大学は公共系でない人材が世界的な

対流の熱源となる期待がある。

- ・対流の担い手が共助社会である。共助社会の起源は国土計画であり、国土計画では、人のつながりが即ち交流連携であった。三全総までは大都市圏の効果を如何に地方に波及させるかが命題であり、地方に開発拠点を設けて道路で繋ぐハード整備が中心であった。四全総からは、ソフトの意味合いが含まれるようになり、人のつながりや参加が多様な地域をつくることとされた。さらに、国土形成計画からは多様な主体が新たな公と呼ばれ、国の基本戦略となった。それが今日の共助社会につながっている。
- ・内閣府の共助社会づくり懇談会では、これまでの議論の整理が終わり、今後、休眠口座に関する議員立法が成立すれば、それに関する検討の新たなスタートラインに立つことになる。共助社会づくりは多様な主体の参加で国、地域を築いていくものである。
- ・共助社会づくり懇談会でも国土強靱化は大きなテーマである。国土強靱化法では、強靱化に関する国の基本計画が全ての計画の上位になると定義されている。共助社会づくり懇談会は、強靱化の部署と密接に連携をとっており、今年3月までに人のつながりが強靱化につながるというテーマで事例集を作成した。現在議論しているのは、民間活力の活用である。民間が災害に強い生産環境を構築すれば信頼につながり、国の強靱化にも繋がる。3. 1. 1で問題になったのは被災地に重機がないことであった。公共事業が減り、土木建設業者の投資が抑制されリースが主流になったためである。平時は良いが有事の対応が困難な事例である。

(伊藤委員)

- ・中経連で昨年策定した2040年の中部圏を描いたビジョンと、本日示された中部圏広域地方計画中間整理、社会資本整備重点計画の方向性は基本的に合致しており、大きな異論はない。
- ・少し細かい点でご指摘させていただくと、広域地方計画について、第2章の将来像で、「産業・技術のショーケース」があるが、世界最強最先端のものづくりを目指す当地域には「ショーケース」という表現は軽すぎるのではないか。マザー機能、クラスター、聖地など重みのある表現を考えてはどうか。
- ・資料4で12プロジェクトがあるが、港湾・空港・道路などのインフラ整備の大半がものづくり関係に書かれている。インフラ整備は、観光、地方創生、経済全般、国土強靱化などに関係してくるので、そちらにも記述を加えていく必要がある。
- ・資料3の戦略1の「国際競争力を支える産業基盤の強化」の「②国際拠点空港の機能強化」で、中部国際空港の国際貨物ネットワーク拡充と記載してある。ものづくりの部分なので、これでも良いかも知れないが、これを単独で見ると旅客はどうなのかという印象を受ける。観光などの面を考えると物流だけでは寂しい印象を受ける。
- ・戦略2の「リニアを活かした新たな中部圏の形成」で名古屋の位置づけを世界のイノベーションセンターに重きを置いている印象を受けるが、肩入れし過ぎているのではないか。名古屋は中部圏全体のゲートウェイという意味合いにとれるようにした方が良い。
- ・一般的に、人材育成について産学官の連携という表現が弱い印象を受けるため、より記述を充実させた方がよいように考える。
- ・戦略5の「全ての人々が輝く人づくりPJ」で障害者の記述もあるが、女性・高齢者のウ

ェイトが高いと感じる。障害者、外国人の視点をもう少し加えられてはどうか。

- ・社会資本整備重点計画について、重点目標1のプロジェクトは9つのエリアに分けてまとめるという話があったが、重点目標2以下の切り口と相当異なる印象がある。全体をまとめる中で、9つの地域をバラバラと書くのはバランスが悪い印象を受ける。
- ・インフラ整備の関係はものづくりのウェイトが高い。インフラ整備はものづくりだけでなく他様々な分野に関わってくるものなので、そこを明確にした方が良い。
- ・重点目標2の戦略目標で、社会資本整備の戦略的な維持・更新とあるが、まだ今後、整備していくべきインフラはある。それゆえ整備・維持・更新と記述していただきたい。

(内田委員)

- ・中部圏広域地方計画について、第2章の将来像は内容を読めばその通りと納得するが、キャッチコピーのようなワードがあると、地域、メディアに対するアピールになる。
- ・そのような観点で2章に「ものづくり産業・技術のショーケース」という表現が気になった。意味合いはわかるが、世界最強最先端に対して、ショーケースという表現は小さな規模の印象であり、受け身のような印象を受ける。明確な代替案があるわけではないが、マーケットプレイスやディスプレイエリアなど、圏域として拡がりのあるワードや代替案がでると良い。愛知県では、ものづくりや地方創生でマザーエリアなどのキーワードの提案をしているが、中部圏でも規模を大きくした言葉が打ち出せると良い。
- ・また、第2章の2節にはスーパー・メガリージョンのセンターとして牽引するというの、首都圏、近畿圏を含んだエリアとしてのセンターということだろうが、全圏域人口の対流を引き起こす日本のセンターとなるような、企業、メディア、住民に長い間印象の残るようなインパクトを打ち出すことも求められる。

(江崎委員)

- ・中部圏広域地方計画の第2章について、地方で観光に携わっている立場からは、「暮らしやすさと歴史文化に彩られた」という表現に観光分野などが集約されているとは思いますが、この表現だけでは自分たちと関係ない印象を受けてしまう。産業として観光という観点を入れていただきたい。
- ・第3章について、戦略1の「グローバル展開の支援」の項目で留学生や研修生の受入に触れているが、ここで想定されているのは主にもものづくりである。しかし観光でも留学生が訪問したり、留学生が就職するなどの事例もみられる。観光は働く場としてではなく、学ぶ場として高度人材を受け入れているので、そのような実情があることを入れて頂きたい。
- ・戦略2の中で、ネットワークの強化に集約されていると思うが、三重県とも関係があることを示すために、「三重県」という言葉を入れて頂きたい。
- ・戦略3の中で農村地域や中山間地域の記述はあるが、沿岸部や漁村が出てこないの、例えば、農村地域や漁村地域、中山間地域と沿岸部のように入れて頂きたい。
- ・戦略3の「地域資源を最大限活用する観光振興」に関して、環境省が国立公園を観光に活用したいという意向を持ち、東アジアからの旅行者は自然に対する期待値が大きいことから、観光資源として国立公園を加えて頂きたい。

- ・社会資本整備については東京に集中しすぎないことと同様に、当地域では名古屋に集中しすぎないプロジェクトが必要である。
- ・また、何をもって社会資本とするかという整理が必要ではないか。ハードだけでなく、中部圏に必要な社会資本とは何かを整理する必要がある。

(奥野座長)

- ・昇龍道は全国の広域観光のモデルとなっており、国の方でも推進している。
- ・漁村の問題について、全国計画でもお叱りを受けるが、漁村を「等」として処理しているが、計画としてはもちろん入っている。
- ・スーパー・メガリージョンは、東京－名古屋－大阪が一体となって形成するということが基本としてある。

(大野委員)

- ・資料3の4ページに5つの成長戦略の関係性を示す図がある。これらの5つの戦略には、お互い対立する部分もある。特に環境共生と他の4つの戦略では対立する点が多い。それぞれをどのような方針で対処していくかが見えにくい。現状では戦略1から戦略5が、それぞれ無関係に独立して進められていく印象がある。
- ・持続的な発展を続けるには、様々な資源をできるだけ消費しないことが求められるが、それをどのように進めていくかが全体を通じて見えにくい。

(加藤委員)

- ・第2章4ページの図は美しくまとめられているが、対流を起こすにはヒトがいなければならぬ。現在の社会ではお金よりもヒトが根幹を担っていると感じる。人材育成は非常に重要である。
- ・当地域はものづくりの地域だが、女性を含めて理系、工学系人材の育成についての理解が低い。これが産業振興を進める上で足かせになっているのではないか。女性については、KPIなど数値を示して推し進めるなどの対応が求められる。
- ・また、ベンチャーキャピタルから、静岡は新しい投資先がないと言われた。新しいことをはじめるならば、中部圏ではなく東京ではじめるということが多いと感じる。大企業が多く安定していることが、逆に、新しいことをするのならば他の地域や東京へ、という流れになっている懸念がある。人材を呼ぶのであれば、新しいことにチャレンジしやすい地域であるというイメージづくりができるが良い。
- ・さらに、物流が弱い地域では、農業をあきらめざるを得ない状況になっているため、物流の強化が必要である。これに関しては「道の駅」の機能を融合させること、保管・保存機能を持たせることを提案する。道の駅は八百屋、商社などが入ってこない中山間地域に立地しているので、物流拠点としての機能を持たせることが必要になってくるのではないか。

(木村委員)

- ・戦略5を中心にお話しする。

- ・成長のために民間投資を呼び込むというお話の中で、営利目的ならば、民間投資を呼び込んでいかに儲けるかという話になるが、共助社会においては、資金や時間を投じていかに成果が得られるかが重要になる。非営利の分野で選ばれるためのキーワードは「成果」である。「成果」で良くあげられるのは、セミナー回数や参加人数など、いわゆる直接的な結果である。しかし、第三者がお金を投じたことで、ヒトの意識、行動がどのように変化し、その結果として地域や社会がどう変わったかを成果として求めていく必要がある。
- ・また、共助社会の内容の中で資金循環、資金調達について記載してあり、民間投資を如何に呼び込む手法として、ふるさと納税やクラウドファンディングに触れていただいている。最近の代表格として、ソーシャルインパクトボンドがあげられる。これは、これまで公共投資で賄われてきた事業について、民間投資を呼び込み、成果が得られた場合に投資家へリターンする取組で、日本でも横須賀市の特別養子縁組や尼崎市の若者就労支援など、事例が出始めている。
- ・このように成果に拘る、成果を可視化することで民間投資を促していくことも記載いただけると良い。
- ・最後に、文言として気になったのは「遺贈」の記載である。遺贈は遺言書を書いて寄贈するもので、相続寄附とは区別して記載していただきたい。

（奥野座長）

- ・ソーシャルビジネスが非常な勢いで増えており、中間支援団体も成長している。
- ・共助社会づくり懇談会ではマネジメント人材を育てるための取組を進めている。
- ・資金調達について、NPOバンクなど間接金融は伸び悩んでいるが、一方でクラウドファンディングのような直接金融が伸びている。銀行もクラウドファンディングをはじめめている。
- ・共助社会づくり懇談会では休眠口座の扱いが大きなテーマである。議員立法が可決されれば、即仕組みづくりに移行する予定である。

（後藤委員）

- ・回を重ねる毎に全体像が明確化してきた。
- ・第2章の将来像の「暮らしやすさ」「歴史文化」「世界のものづくり対流拠点」はバランスの取れたキーワードが入っている。その後、世界の中の中部、日本の中の中部と分けているが、中部の中の一人一人に向けた像がないのが残念である。安全・安心も大切だが、ものづくりの集積を活かした日本一暮らしやすい地域というような視点があると良い。
- ・資料3の4ページについて、人材育成、共助社会は重要であるが、それをつくるための政策的支援が必要である。ものづくりの成果やインフラ整備が活かされて、人材育成や共助社会に繋がる。現状の書き方では繋がりが見えない。5つの要素が相互に繋がっている、循環しているところが見えた方が良い。
- ・人が集う地域となるためには、子どもが生まれ、質の高い教育を受けられる基盤が重要である。子育て支援は親の視点からになりがちだが、教育という観点も充実していただ

けると良い。

- ・高齢者は介護の対象だけでなく、社会貢献してもらうことが重要である。高齢者を75歳未満の前期高齢者、75～84歳、85歳以上の三つに分けてもらうことが必要ではないか。元気なうちの田舎暮らしでなく、元気なうちのUJIターンが重要。75歳ぐらいまでは都市部で活躍してもらい、その後、自分の故郷に戻る、そのようなことを記載してもらうのが良い。中部圏は人のつながりが強い地域なので、そのような意味合いを述べてもらえると良い。
- ・本計画に関連する事業を実施するときは、それがわかるようなマークを付けてほしい。一体となった取組となるようなマークを考えてほしい。

（奥野座長）

- ・愛知県の人口あたりのNPOの数は少ないが、これは単純に活動が盛んでないということではなく、地域のつながりが強いということである。三世代同居が多く、豊かな地域である。また、財政が豊かで行政が様々な事業に取り組んでいる。
- ・働き口が十分あるということもあり、ソーシャルビジネスについても活発ではない。

（高木委員）

- ・第2章の構成、戦略の関係性の構図はとても良い。
- ・6点、お願いがある。まず戦略4の「自助・共助体制を活かした防災力の向上」に関して、近年では各コミュニティでの防災力の強化のために、地区防災計画を策定できるようになっている。そのような分野での人材育成を含めて、コミュニティで防災力を高めていくことを行政としてサポートいただきたい。
- ・また、コミュニティ防災計画を策定するときは、ボトムアップで進めていくので、その支援を考えていただきたい。多くの大学で防災関係のセンターが設置されているが、国公立6大学で東海圏減災研究コンソーシアムを組成し、防災人材を育成に取り組んでおり、その活躍に期待している。
- ・中部の特徴として、広域にゼロメートル地帯が広がっている。それゆえ津波、洪水の避難にどのように対応していくかが大きな課題である。
- ・インフラの整備、活用、メンテナンスの推進に関しては、費用対効果を分析する必要がある。効率性の議論と公平性の議論をした上で、どのように維持管理し、どのインフラを残していくか議論していくことが重要である。
- ・戦略5の人材育成に関して、大学の人材育成が中心になっているが、文部科学省では、高校の学習の目的が大学受験になっているため、進学校であっても地域と高校が連携し、学びをどうしていくかを進めている。それを地域の産業界で支えていてもらいたい。
- ・最終的には、中小企業をはじめものづくり企業とのマッチングができていない。大学、高校と産業界が連携してキチンとマッチングしていくことが重要である。

（森川委員）

- ・基本的によくまとまっていると感じる。第2章の三つの目標も良いが、ショーケースという表現は気になる。

- ・次に、第3章で戦略が記述されているが、これは戦略ではなく、目指すべき方向をかみ砕いただけのような印象を受ける。資料4では、プロジェクトが記述されているが、わかりにくい印象を受ける。戦略とは、これが実現すれば目指すべき方向のどこに効くといったダイナミックなものだと思う。
- ・例えば、北陸と連携する戦略について、連携が実現すれば産業面ではコンポジット・ハイウェイ、観光面では昇龍道の結びつきが非常に強くなる。また、日本のハートランド性が金沢と結びつくことでより強くなるなどとすると、様々な良さが出てくる。それを支えるための社会資本整備として、北陸新幹線の敦賀より先を米原と接続することで、東京－北陸－中部の三角形交流ができる。
- ・また、伊勢湾の魅力化という戦略がある。木曾三川の水の浄化や、東京湾、大阪湾にはない、篠島や日間島などの離島の魅力を上げると良い。
- ・産業面では、世界のゲートウェイ整備とグローバルおもてなし戦略が必要である。ゲートウェイ整備では、セントレアの2本目滑走路の整備と伊勢湾の浚渫土砂を使うのならば、それにより名古屋港を整備していく。グローバルおもてなしは、観光客はもちろん、世界の高度人材が定着するような整備を進める。
- ・中部型コンパクト＋ネットワーク戦略があっても良い。限られた鉄道インフラの駅を中心に、モビリティセンターを整備する。そこに自動運転の自動車をアクセスさせ、中山間地域の交通を支援する。また、新東名・新名神のトラック自動運転路線を整備することで、産業の活性化と東西大動脈のスムーズ化を図る。
- ・ハートランドプロジェクトとして、日本らしい中部をより美しい国土とする、水の浄化、おもてなしなど、愛される地域とする。例えば、野点の看板を昇龍道で統一するなどである。
- ・戦略とそれによって効果のある方向を明確にしたうえで、その下に戦術が並んでいくのがわかりやすいのではないか。

(辻本委員)

- ・広域地方計画について、まとまってきた印象であるが、なぜ最初の戦略がものづくりなのか。それが分かるように目標と戦略と戦術の階層性をわかりやすくする必要がある。「世界最強最先端ものづくり」とあるが、何を目的に何を具体化していくのかを含めて、書き方を見直した方が良い。
- ・広域地方計画と社会資本整備重点計画を一緒に議論するのはわかりやすいし、整理する上で良いきっかけになる。社会資本整備について、これまではハードを整備した後にソフトを検討していたが、ソフト機能を守るためにどのようなハードが必要か、ソフトからハードを考える良いきっかけとなる。
- ・将来像のキャッチフレーズについて、暮らしやすさ、歴史文化はどの地域でも通用する言葉である。また、対流という言葉には様々なスケールがあり、将来像の「世界ものづくり対流拠点」の対流はどのようなスケールなのか十分説明できていない。整理した上でキャッチフレーズを考えてほしい。
- ・また、中部の歴史文化について、「戦国からいきづく新進気鋭」という表現があるが、いかにも戦國的である。戦国時代という下克上の時代を築いたのではなく、近世を切り開

いたというような見方でなければ、ものづくりと繋がりが掴めない。

- ・大学の拠点の整備について、ものづくりのためだけでなく、文系を含む知の拠点ができ
ることで、安定し成熟した地域になる。知の拠点が、ものづくりのみに特化しているよ
うな表現であるため気になった。
- ・「リニアの効果を最大限活かした」というフレーズがみられるが、リニアを中部のため
だけに使うのではなく、国土全体でどのように活用していくか、中部から発信できるよ
うになるとよい。

（奥野座長）

- ・知の拠点に関して、文系を軽視しているわけでない。国立大学の人文社会系の競争力が
落ちていることが問題である。競争力のあるところに注力していくということである。

（牧野委員）

- ・多様な主体をどのように捉えるか、誰が担っていくかを意識することが重要である。様々
な主体が当事者意識を持ち、計画を推進していくためには、どのようにサポートし、環
境づくりをしていくかが重要になる。ものづくりは企業が主体となるが、それ以外もど
こが主体的に受け持つのかを明確にし、当事者意識を持つような整理が求められる。い
ろいろな方に当事者意識を持ってもらうことが必要である。
- ・連携の重要性が明確に打ち出されている。グランドデザイン2050では、スーパー・
メガリージョンの形成やナレッジリンクなどが打ち出されているので、広域地方計画で
意識されているはずだが、必要であればさらに打ち出していくことが求められる。
- ・産学官の連携をどのように進め、社会資本整備とどのように結びついていくかの記述が
もう少しあってもよい。
- ・モデルケース的に飯田市の再生可能エネルギーを取り上げていただいているが、ラウン
ドアバウトも盛り込んでほしい。ラウンドアバウトは、地域住民の要望に添って社会実
験の積み上げ、道交法の改正へとつなげたボトムアップの事例であり、このような取組
を今後も進めるといふ打ち出しができるとうい。
- ・地域連携を中期目標に入れていただいたのは良い。基礎自治体と広域自治体の縦の連携
だけでなく、横の連携が重要であり、それを社会資本整備が後押しすることを打ち出す
ことが重要である。

4. その他

（事務局：大野中部圏広域地方計画推進室長）

- ・様々な意見を頂き非常にありがたいと感じている。特に第2章について、組み立て方、
ショーケースなどの表現、戦略という言葉の意味など検討していきたい。また、主体の
問題など普段意識していない部分の貴重なご指摘をいただいた。

（事務局：森山企画部長）

- ・社会資本整備重点計画について、ハードだけでなくソフトとからめてどのように落とし
込んでいくのか等について、今回のご意見を踏まえて中部圏広域地方計画と整合を図り

つつ検討していきたい。

(奥野座長)

- ・大都市戦略検討委員会では4つのことを中心にまとめている。ひとつはグローバルにビジネス展開できること。2番目に高齢者が住みやすく子供の産まれる街。3番目は環境に優しく歴史文化が感じられること。4番目は安全・安心という観点で議論している。もうすぐ発表されるので、参考にしていきたい。
- ・社会資本整備重点計画の基本的考え方については、異論が出てないためこの方向で進めていただければと思う。

5. 閉会

(事務局：大野中部圏広域地方計画推進室長)

- ・次回の第2回中部圏広域地方計画協議会は9／10に開催する予定である。その前に9／2に幹事会を行い調整する予定である。
- ・第4回中部圏広域地方計画有識者会議は12月頃を予定している。お忙しいところ恐れ入りますが、ご出席をお願いいたします。
- ・本日の意見を反映した資料は来月中旬に発送予定である。個別にお伺いして意見を調整させて頂く場合もあるので、その際はよろしくをお願いいたします。

以上